適性検査Ⅰ

注　意

1　問題は **1** のみで、**5ページ**にわたって印刷してあります。
2　検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
3　声を出して読んではいけません。
4　答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5　答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
6　**受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

1

文章1 と **文章2** を読み、あとの問題に答えなさい。

（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

文章1

うちにある鍋は、そうとう古い。若い頃、実家から出たときに買ったもので、今もそのまま使っている。そのころそろえたのは、鉄製のフライパンと中華鍋、大小の片手鍋に寸胴鍋の五つである。一人暮らしを始めたばかりにしては、けっこう多い気もするが、二十五年間、それだけで巻き寿司やら、ギョーザやら、くん製やら、いろいろつくってきたわけで、この先もこの五つで十分だろうと思う。

そう人に話すと、なぜヤカンがないのかと言われた。考えてみれば、私は自分でヤカンを買ったことがない。お茶を入れるときは、小さい方の片手鍋を使っていた。その姿がよほど情けなく思えたのか、母が一万七千円のケトルを買ってくれたが、気がつけば、やっぱり片手鍋で湯をわかしている。

洗いやすいし、沸騰するのがすぐわかって空だきすることもないし、使う分だけわかせるし、とっても便利だと思うのだが、母は「もう、情けない」と嘆くのだった。お湯は、ヤカンでわかすものという頭なのだろう。

そういえば、うちはコンロの下についている魚焼きグリルでパンを焼く。これも、母いわく「情けない」ことらしい。トースターぐらい買えと怒る。が、私は、そんなものは、かさ張るので買いたくない。魚焼きグリルで焼くとパンが生臭くならないのかと心配する人がいるが、そんなことはなく、トースターで焼くより、うまそうに仕上がるのである。買ってきたピザやフライを温め直したりと、とても便利に使っているのだが、みんなはそんなふうに使っていないのだろうか。使っていないのなら、魚焼きグリルという名前がよくないのではないかと思う。

○○用と言われると、それ以外のことで使うのは、ちょっと気がひける。犬用の食器と言われれば、新品でも人間が使うのは、ちょっとなぁと思ってしまう。最近は、しょうゆでも用途がさまざまで、卵かけご飯用というのもあったりする。普通のしょうゆを切らして、しかたなく卵かけご飯用でさしみを食べたりすると、なぜかもの足りない気がする。私の舌が、そこまで敏感だとは思えない。しょうゆの成分など、さほど変わらないはずなのに、なぜだろう。

私たちは、一旦、（ア）＿＿＿＿＿＿＿＿コトバに縛られてしまうと身動きができなくなってしまうようだ。こんな状態を「フレームがかかっている」と呼ぶ。ものを書く作業は、このフレームをうまく外すことである。つまり世の常識的な考え方から自由にならないと、なかなか人に納得してもらう作品にならないのである。なので、私たち夫婦は、よくでたらめな話をしては、二人でゲラゲラ笑っている。人が聞いたら、ばかばかしいと思える話で、それはお金にはならない創作なのだが、私たちの場合、こんなことが、けっこう重要な作業なのである。

しかし、バレンタインデーのチョコや、節分の巻き寿司など、これがないと季節を感じないというものもある。私自身も、いまさらやめる

のもなぁという感じで、ずるずる続けている。

最近、仕事が忙しくなって、なかなか本も読めない状態が続いている。なので、思い切ってメールをやめることにした。ケータイからも、パソコンからもアドレスを削除してしまうと、今まで何だったんだろう、というほど静かになった。本当に用がある人だけから、ファックスや郵便で要領よくまとめたものが送られてくる。けっこう儀礼的なやりとりが多かったんだなぁと、あらためて思う。不思議なことに、そんな生活を始めると、人によく会うのである。会って、少し立ち話をして、バイバイと別れる。なくても大丈夫と、自分で確認するのは、そんな悪いことではないような気がする。

（木皿泉「木皿食堂２　６粒と半分のお米」による）

〈注〉

中華鍋――底の丸い浅い鍋。（図１）

片手鍋――持ち手が一つの鍋。（図２）

寸胴鍋――太さが変わらず、底の深い鍋。（図３）

図１

図２

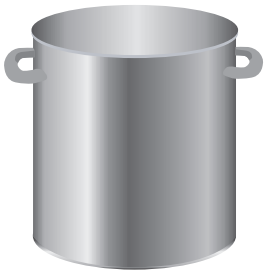

図３

くん製――肉や魚などをけむりや熱などで加工し、長持ちするようにした食べ物。

ケトル――やかん。

空だき――火にかけた鍋などの中の水がなくなってしまうこと。

かさ張る――場所を取る。

用途――使いみち。

フレーム――わく。

削除してしまう――消してしまう。

ファックス――紙にかいた文字や図を、電話回線などを使って送受信する装置。

儀礼的――礼儀として型どおりにすること。また、型どおりで心のこもっていないようす。

文章2

僕の書は、よく批判されることがあります。

「あんな絵のようなもの、書ではない」

たとえば、そんな指摘です。

けれど、そもそも「文字」の多くは、本を正せば、形から着想を得た*象形文字がとても多いですよね。

たとえば、僕が大好きで、自分の雅号*「双雲」にも使っている「雲」という字。

まず上部にある「雨（あめかんむり）」は、いうまでもなく天から雨水が落ちてくる様子からできあがったものです。そこにもくもくと立ちのぼる煙のような雲の姿を表した「云」という象形文字をくっつけることで、「雲」は形作られています。

こんなふうに、文字の多くは、そもそも絵みたいなものです。

つまり、絵みたいなものが、書なのです。

ならば、僕はどんどん視覚的な表現を使うべきじゃないかなと思っています。「伝わる」ことにこだわる僕は、だからこそ絵のような要素を、もっと書にも取り入れたい。そう思い、書に取り組んでいるのです。

だって同じ雲でも、いまにも雷雨をもたらしそうな、黒々とした大きな雲と、さわやかな秋の夕暮れに、薄く流れるように敷き詰められた静かな雲とでは、人が受ける印象はまったく違いますよね。もちろん、線の細さや文字の勢い、かすれや濃淡などでその差を書き分けることはできますが、さらに「雲」をそもそもの象形文字のレベルにまでさかのぼれば、もっともっと自由な書き分けができる。「いかにも荒々しい雨を持ってきそうな雲」から「ずっとながめていたくなる、心地良い空の雲」まで、幅広い表現ができるからです。そのほうが、伝わりやすいと考えているからです。

僕はいつでも自由に、視覚的な表現を駆使して書に取り組むようにしています。伝えるためなら、*どん欲に表現にこだわるのです。

たとえば、文字の「大きさ」。

当たり前のことですが、大きな声を出したほうが、声が聞こえる範囲は広がり、言葉は伝えやすくなります。当然、書にもそれはあります。大きく力強い文字を書けば、それだけ遠く離れても、見えるし、読める。ただ、㋑それだけじゃないのが、伝えることのおもしろさでもあるんですね。

ずっと普通の音量で話していたのに、ある箇所にきたら、ふと声が小さくなる。

「え、何？　なんていったの？」と思わず聞き耳を立てることってありますよね。むしろ、声を小さくしたほうが、注意を喚起する。そんなことは、日常会話でもあるものです。

だから、僕は、あえて字を小さく書くことがあります。

ちょっと顔を近づけて、じっとそれを見つめてもらうことで、じんわりと誰かに伝えたい言葉があるからです。

「*筆の入れ方」は、言葉の質感を変えます。

ぐっと鋭く筆を入れたら、線はそのまま鋭さを帯び、書いた言葉も

鋭く読む方に刺さってくる。あるいは、丸く入れると、丸い柔らかな言葉となって響いてくる。

だからこそ、「刃」「強」「岩」といった、*こわもての文字をわざと丸く書いたりすると、ものごとの多面性や多様性を、わかりやすく表したりもできるわけです。

「墨の色」は、あふれる思いのようなものを、表すことができます。

たとえば「愛」という文字を書く際、墨をじわりとにじませ、ほうぼうに広がるように大きく書くことで、「愛」という言葉に収まりきらない愛情みたいなもの。あるいは、特定の誰かではなく、周囲へ、世の中へ、世界へ向けて放射される大きな愛情みたいなものを表せます。

（武田双雲「伝わる技術」による）

〈注〉

書――書かれた文字。
象形文字――ものの形をかたどって作られた文字。
雅号――芸術家が本名以外につける名。
どん欲――ひじょうに欲が深いこと。
喚起――よび起こすこと。
筆の入れ方――線の書きはじめの筆の使い方。
こわもて――ごつごつして荒々しい印象のこと。

〈問題1〉 ㋐＿＿＿＿＿＿＿＿ コトバに縛(しば)られてしまう とありますが、このことの具体例を一つ、本文中から探(さが)して書きなさい。ただし、二十字以上三十字以内で、解答らんに合わせて書くこと。（、や。などもそれぞれ字数に数えます。）

〈問題2〉 ㋑＿＿＿＿＿＿＿＿ それだけじゃないのが、伝えることのおもしろさでもある とありますが、そのような「おもしろさ」が表れている筆者の工夫(くふう)の具体例を一つ、本文中から探(さが)して書きなさい。ただし、何のためにそうするのかがはっきり分かるように、解答らんに合わせて書くこと。

〈問題3〉 **文章1** と **文章2** それぞれの「自由」についての考え方に共通する内容をまとめた上で、それについてのあなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の〈**きまり**〉に従(したが)いなさい。

条件1　三段落構成(さんだんらくこうせい)にし、第一段落には、**文章1** と **文章2** に共通している考え方を書き、第二段落および第三段落は、内容やまとまりに応じて、自分で構成を考えて書くこと。

条件2　あなたの考えは、一つにしぼり、理由をふくめて書くこと。

〈**きまり**〉

○題名は書きません。
○最初の行から書き始めます。
○各段落(だんらく)の最初の字は一字下げて書きます。
○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合も行をかえてはいけません。
○「、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じます目に書きます。（ます目の下に書いてもかまいません。）
○段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
○最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。